領域「環境」における季節感の指導について

－本邦幼稚園や保育園の現状、海外の幼稚園の比較も含めて－

横井　一之・齊藤　公彦*・小野　克志**・海老原　孝一***・金森　由華****

The Instruction of a Sense of Seasons in the Field ‘Environment’

— through the Comparison of Kindergartens in Germany, Australia and Japan—

Kazuyuki YOKOI, Kimihiko SAITO, Katsushi ONO,
Koichi EBIHARA and Yuka KANAMORI

要約

幼稚園教育要領[1)]、第２章の「環境」２内容（３）に「季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く」とある。この項目のみが、幼児の季節感の指導について述べている訳ではない。日本は季節の変化に富み、それ故に微妙な情緒も育ち、保育すべてに大きな影響を与えている。季節の変化があるので心身が鍛えられるし、それに伴い言葉が育ち、表現も豊かとなり、人間関係もより複雑で親密になる。季節の変化が日本を構成していると言っても決して過言ではない。

本稿の目的は、すべての源泉である季節感の指導が保育において実際にどのように展開されており、この項目（３）がどう実現されているかを、諸外国の事例との比較も含めて検討することである。

なお、１．幼稚園の実践事例を齊藤、金森、２．保育園の実践事例を横井、３・１．ドイツの幼稚園の実践事例を海老原、３・２．オーストラリアの保育現場の実践事例を小野、４．考察を５名で執筆した。

Abstract

The content related to the environment is described as “Being aware of changes in nature and in people’s lives in accordance with the seasons.” in the Course of study for Kindergarten in Japan. Not only this section are described the guidance of the children’s sense of the season.

Japan is a country wealthy in the cycle of the seasons. This transition of seasons

*　名古屋ひまわり幼稚園主任
**　名古屋文化学園保育専門学校教員
***　共益法人フランクフルト日本人幼稚園園長
****　愛知淑徳大学福祉貢献学部助教

encourages children to develop rich emotions through close contact with surrounding nature. It also cultivates a foundation for children's balanced development of physical and mental, and fosters in children the ability to have a grasp of the language necessary for everyday life. In addition, children enjoy expressing feelings and thoughts in their own way and become familiar with and deepen relationship with others through the interaction with their surrounding environment. It is no exaggeration to say that the cycle of the seasons constitutes the nature of Japanese society.

The purpose of this paper is to discuss how the guidance of the children's sense of the seasons is developed and recognized in the field of Early Childhood Education and Care in Japan including the comparison with the cases of overseas.

１．幼稚園の実践事例

１・１．Ｈ幼稚園における季節感指導の取り組み

幼稚園において季節感に関する指導は、年間行事や自然観察と深くかかわり取り組みの歴史も深い。しかし、年間行事や自然観察としての資料は多く残されているが、季節感の指導そのものに注目した資料や研究は探す限り見当たらない。本章では、幼稚園における季節感の指導を名古屋市にあるＨ幼稚園の教育課程から実践例を示す。幼稚園における教育活動では日々の生活のなかで季節感を感じさせる壁面装飾や言葉掛けなど、季節感に関する指導はあふれている。教育課程や指導案などに記載される事がなくとも生活の中で「寒くなってきたね」「サンタさんくるかな」など季節感指導と意識されることなく季節的な会話が教師と幼児の間で繰り返されている。幼稚園教育の多くが間接的には季節感指導に関係していると考える事が可能であると言える。本章では、Ｈ幼稚園における直接的な季節感の指導に関する実践を年間行事、造形活動、音楽活動それぞれの総数に占める直接的な季節感指導の割合を表した（表１-1)。

結果は以下の通りである。年間行事では学年ごとの季節感指導差はほとんど見られなかった。また、年間行事が占める季節感指導に関連する行事が 30％程度であるのに対し、造形活動と音楽活動は 40％以上が季節感指導に関する指導になっている。年間行事には、季節感指導とは直接的には関連していない行事が多く含まれるためである。３歳児と４歳児の年間行事総数は同じであるが３歳児が約 26％に対し、４歳児は約 32％である。４歳児の方が季節感指導に直接関連する行事が多い事が示された。５歳児の季節感指導は約 32％であり４歳児とほぼ同じであるが、総数が 45 回であるので季節感指導に直接関係している行事が多い事が示された。

造形活動は最も多く季節感指導の割合が占めている活動である。こいのぼり、鬼のお面など季節行事に関する作品が多いためである。造形活動は自然物を活用した活動など幼稚園教育要領にも示されている。季節行事に関する造形活動に取り組む前には、活動導入時にその行事の由来など季節感に関する指導を行っている。

音楽活動では総数の学年間差異はほとんど見られなかった。季節感指導に関する活動でも学

年間差異はほとんど見られない。音楽活動は指導案や教育課程などに示されている活動のみではなく給食前や紙芝居前など生活の中で教師ごとに音楽を使った様々な遊びが展開されている。このため、教育課程や指導案のみでは季節感指導に関する活動の正確な数値であるとは断言できないが参考には値するので記載した。

Ｈ幼稚園の教育課程では「季節感を指導する」というような季節感を強調するような教育活動は行っていない。教育課程においても「季節感を味わう」ことをねらいとして設定している箇所はない。しかしながら教育活動では季節感は重要視され、季節を味わう活動が多い。その要因として、日本人の生活は季節と密接に結びついており、日常生活で季節感を積極的に感じようとする事が少ないと考えられる。当然のように季節があり季節感は日本人にとって呼吸のようになっているのである。幼稚園では生活と教育が重なり合って存在するため生活のなかで季節に関する教師の発言は多くあることが予想できる。そのため、あえて教育課程や指導案に強調して記載することはないが活動に多く取り入れていると考えられるのである。

表１－１　直接的な季節感の指導に関する事項　　（単位：％）

	３歳児	４歳児	５歳児
年間行事	26.4（ｎ＝34）	32.3（ｎ＝34）	33.3（ｎ＝45）
造形活動	45.7（ｎ＝35）	42.2（ｎ＝45）	41.1（ｎ＝34）
音楽活動	43.3（ｎ＝53）	41.1（ｎ＝56）	42.5（ｎ＝54）

図１－１　こいのぼり制作

図１－２　みかん狩り

１・２．Ｈ幼稚園における季節感指導の実践―「思い出帳」の取り組み―

Ｈ幼稚園における季節感指導の取り組みとして、３歳児、４歳児における思い出帳の取り組みを挙げる事ができる。３歳児の造形活動総数が 35 回であるのに対し思い出帳の取り組みは 11 回である。つまり、造形活動の 30％以上を思い出帳の取り組みが占めている。思い出帳とはＨ幼稚園が 40 年以上取り組んでいる活動である。毎月、スケッチブックに季節を象徴するものを表現していく。３歳児４月では教師が折り紙をチュウリップの形に切り取ったものを貼るだけだが、４歳児になるとクラッチングやドリッピングなどの技法を用いる。折り紙も教師が用

意したものではなく幼児自身で折り、制作していく。その他の造形活動は壁面に展示したり行事で活用したりするが思い出帳は壁面などに展示する事が無く、他者と比較することなく、一人ひとりの成長がよくわかる点が特徴である。

思い出帳で季節を象徴するものを題材とする事により、教師が導入時に題材の説明をし、幼児は季節感を味わう。導入時には４月であればチュウリップの実物を提示し、開花する季節や植物の特徴などを説明する。また、９月のお月見であれば「おつきみ」とだけ説明するのではなく「中秋の名月」という単語を用いてその由来なども説明する。５歳児では、年間行事数が多くなることや季節感が養われてくるため、思い出帳の活動は行っていない。

思い出帳の活動によりデイリープログラムにある朝の会や帰りの会などを利用し季節感の指導を行ったり、生活のなかでの言葉がけのみではなく、教育活動のなかに主活動として取り入れたりすることにより、落ち着いてより深く季節感を味わうことが期待される。

表１－２　思い出帳　―平成 23 年度教育課程より―

	３歳児	４歳児
４月	ちゅうりっぷ	ちゅうりっぷ
５月	ひよこ	こいのぼり
６月	あじさい	あめ
７月	かに	せみ
８月	―	―
９月	おつきみ	こすもす
１０月	さつまいも	くり
１１月	みのむし	（ひっかき絵）※１
１２月	クリスマス	クリスマス
１月	ゆきだるま	かるた
２月	まめまき	おに
３月	はな	めだか

※１　ひっかき絵は季節感と直接関係はしていない

１・３．今後の課題

幼稚園では季節感指導を多く取り入れていると示唆することができた。本来ならば家庭で行われていた年中行事が現代では学校教育が中心の場となってきているが、就学以降の学校教育では幼稚園ほど重要視はされていない。若手の幼稚園教諭は年中行事の場が家庭教育から学校教育へと移行した世代である。そのようなことから、幼児のみではなく幼稚園教諭も現場に出てから季節感を味わう生活をするようになったり、年中行事の由来を知る場合が予想される。

また、保育者を目指す学生にアンケート調査を行ったところ、身近な自然とのふれあいなど

の体験不足が指摘された[2)]。その要因として、現在の新任教諭は子どもの「三間の不足」が指摘され始めた世代であることが挙げられる。つまり、塾や習い事、屋内遊びが放課後の過ごし方として中心を占めてきた世代なのである。今後は、幼稚園教諭養成の段階や現場での現任研修などで、どの様に幼児に指導するのかのみではなく、教師の経験不足を補充していくような学び経験する機会を提供する必要があるだろう。

２．保育園の実践事例

２・１．季節感を育てる年中行事

保育園の保育は年中行事なくして成り立たないと言っても大袈裟ではない。愛知県Ｔ保育園では、１か月に平均４種類の行事、１週間に１種類の行事がある。さらに、１か月に２度の交通安全教室と１度の避難訓練がある。年間行事 50 種類のうち直接季節感の指導に関連する行事は、「入園式、こどもの日お楽しみ会、遠足・水族館、じゃがいも掘り、七夕まつり、水遊び、盆踊り、夜店ごっこ、ボディペインティング、落花生とり、運動会、さつまいも掘り、遠足・三川公園、七五三参り、みかん狩り、防火訓練、餅つき、クリスマス会、防火教室、かるたとり大会、豆まき、ひなまつり、遠足・地域文化広場、卒園式」の 24 種類である。以下に、各行事で育つ季節感について簡単に説明する。

２・２．行事の中で育つ季節感とは何か

２・２・１．入園式では、満３歳になって４月に入園式を済ませて入園する子どももいるが、それまでにすでに入園した子どもが、けじめというか節目にするために入園式に参加することがある。また、在園児にとっては進級の式となる。この晴れの日をお祝いしてくれるのが桜である。桜の歌は多くあるが、最近 10 年間でも４曲のヒット曲[3)]が生まれている。このことからも、年度の初めに桜が幼児のみでなく日本に住む人の季節感の育ちに大きな影響を与えていることが分かる。入園式の後の桜を背景にした記念写真は、春の思い出の１ページとして残り、子どもの心にしっかりと刻まれる。

桜は別れと出会いの季節を象徴している。日本の春先の気候は気温が一気に上昇する。それに伴い桜が開花し、早い時は１週間ほどで花が散る。この著しい変化が卒業入学の時期のあわただしさと重なり、春を象徴する花となっている。イギリス[4)]は西岸海洋性気候なので春先に気温が急上昇することはない。よって、日本から送られたソメイヨシノものんびりと１か月ほど咲き続けるということだ。イギリス人の落ち着いた雰囲気や、入学式が９月というのも納得がいく。

２・２・２．こどもの日お楽しみ会は、５月５日のこどもの日を迎え保育園付近の休耕田のレンゲソウで遊んだり、こいのぼりを囲んで遊んだりする行事である。

新緑の５月に田植え前の田んぼへ出かけ、ミツバチと一緒にレンゲソウで遊ぶ。ときに蛇が顔を出すこともあるが、草も萌え、命が生き生きしている中で遊ぶことで活力に満ちた子ども

に育つと思う。

２・２・３．遠足・水族館は観光バスを貸し切り、保育園より１時間ほどのところにある水族館へ出かける。水族館が直接季節に関係あるわけではないが、バスの車窓から自分たちがお楽しみ会で遊んだ水田を見ながら、思い出をふりかえりながらお母さんや友だち、保育士と語り合いながら水族館へと向かう。

２・２・４．じゃがいも掘りでは、裸足も気持ちがよい季節となり、土の中から現れる金色にも見えるじゃがいもを手にする。何気なく見ているいも畑から、何気なく食べているじゃがいもが出てくる。何気ないけれど、子どもはとても不思議な経験をする。

２・２・５．七夕まつりは、織姫、牽牛、白鳥(天の川)の星をお祝いする行事である。笹に願い事を書いた短冊を結び、川に流し祈願する。最近は川へ笹を流すと汚染となるので、子どもが笹を自宅に持ち帰る。

２・２・６．水遊びが夏に始まる。保育園の夏の生活は水遊びといっても過言でない。

２・２・７．盆踊りが市の体育館の駐車場で、市の行事として開催される。夜間なので、自由参加であるが、その踊りの練習を保育に取り入れている。

２・２・８．夜店ごっこが幼児向けの盆踊り、縁日ごっことして展開される。日頃慣れている園庭なので、夜間にもかかわらず子どもは気兼ねなく活動できる。縁日ごっこでは、事前に配布された交換券を手渡して、保育士や役員の母親からアイスクリーム、ゼリー、パン、ジュース等を受け取る。

２・２・９．ボディペインティングは、でんぷんのりに色を混ぜた絵の具で指や手を使って描く。夏の暑さがすっかり腰を下ろしたお盆の後に行われる。子どもは自分の身体、お腹や胸、または腕や足に思う存分絵の具を付ける。保育者はその色の美しさに芸術性を求めるのだが、子どもはそんなことお構いなしに、色をどんどん擦りつける。色をいろいろ混ぜると黒に近づく。自分が終われば次は友だちの身体に色を塗りつける。これが、本当の色鬼である。手に色をもって友だちを追いかけ回す。結局、子どもはみんな黒々した色で、捏ね回し渦巻き様の模様を描く。その後、園庭に設けた臨時のシャワー、水道管の穴から飛び出る水でその黒色を汗と一緒に洗い流し、その後保育室前の桶で足を洗い専用のタオルで足を拭き保育室に戻り、活動は終了となる。

この活動は当初領域「表現」の活動だと思っていた。たとえば、赤と青を混ぜると紫になることを自分の体で感じて確認する。実際に子どもと一緒に活動すると、普段の保育ではできないことだが、裸になり、色をかき混ぜ、水で流す。子どもは大きな開放感を味わうと思う。こういう点では、領域「健康」の内容も多く含んでいる。もちろん、幼稚園教育要領の領域「環境」内容（３）の説明を待つまでもなく「夏の暑い日に浴びるシャワーの水は心地よいが、冬の寒い日に園庭で見付けた氷混じりの水は刺すような冷たさを感じるなど、‥‥‥(中略)」[1)]、気候にかかわっており、つまり季節感の指導のかかわりも大きい。

２・２・10. 落花生とりでは幹を引っ張って、土の中に入っている落花生の殻を取り出す。そして、根っこから実を一つずつもぎ取り、水で洗い食べる準備をする。それを調理員に給食室で湯がいてもらい、午後のおやつとする。

２・２・11. 運動会は秋空の下、身体を思いっきり動かし、筋肉の緊張を味わう。最近、地球の温暖化のためか、10 月上旬でも残暑がきびしい年が続いている。ニュースでは運動会における熱中症が頻繁に報道されている。秋の残暑を避けるために５月に運動会の時期を変えた中学校の生徒が、初夏の熱波が早まったせいで、またまた熱中症に襲われるという報道もあった。

２・２・12. さつまいも掘りは、運動会が終わりやや落ち着いた時期に行われる。朝夕やや冷えてきて、少しお日様が恋しくなりかけるころ裸足となって、やや足の裏を緊張させながら行うのがさつまいも掘りである。

２・２・13. 遠足・三川公園の花といえばコスモスである。この遠足の中心的な活動は秋のコスモス園をバックにした記念撮影である。春の桜と秋の秋桜、幼児期のよき思い出でとなろう。

２・２・14. 七五三参りは保育園近所の氏神様にお参りする。一般に七五三は 11 月 15 日に、３歳の男女児、５歳の男児、７歳の女児がお参りする。７歳の女児はかぞえ歳でいえば該当する子どももいる。Ｔ保育園では年齢に関係なく、交通安全教室を兼ねて神社まで歩き、３歳以上の子どもがすべてお参りする。

２・２・15. みかん狩りを行うために、神社近くの畑に行く。保育園の近所の方が世話をしている果樹園である。みかんばかりではなく、柿も実をつけている。田んぼを見ると、金色の穂もすでに刈り取られ、稲の切り株が行列をなしている。秋の深まりを感じる。

２・２・16. 防火訓練は月に１度行っている避難訓練の総決算というべきものである。市消防局から消防士さんに来ていただき、実際に避難訓練を見ていただき講評してもらう。

２・２・17. 餅つきを正月に向けて行う。子どもは３人が３本の杵で餅をつく。それを交代で行い餅をつきあげる。日頃食べている米粒が、実際はもち米とうるち米の違いはあるが、表面がきらきらした餅に変わっていくのは、初めて出会う、しかも自分たちの手で行う科学変化とも言うことができ、子どもの好奇心を大きく揺さぶる瞬間である。

子どもの驚きもさることながら、お手伝いして下さる母親も多くの方が大変興味深く関わってくださる。30 歳ぐらいの方は、すでに餅つきの習慣が無くなってから子ども期を過ごした方がほとんどで、子どもと同じように米から餅への変化を楽しみながら見守られる。

２・２・18. クリスマス会を多くの保育園で行っている。保育要領[5)]にクリスマスツリーの表記があり、戦後クリスマス会が広まったことが理解できる。Ｔ保育園では、歌、踊り、保育士のパネルシアター、そしてスクールバスの運転手さん扮するサンタクロースの登場でクライマックスを迎える。

２・２・19. 防火教室は２・２・16. 防火訓練の関連行事で、実際の火事を模倣して人工の煙を発生させた保育室の中を歩いたりする。報道によると火災では、子どもが訓練のつもりでいたためパニックにならずに済んでよかったという話をよく聞く。避難訓練や交通安全指導は、

定期的に何度も行い、行動が板についた状態にすることが大切である。

２・２・20. **かるたとり大会**はお正月の子どもの遊びの定番である。Ｔ保育園では、犬棒かるたの様なかるたを用いている。百人一首を用いて行っている保育園もあると聞く。

２・２・21. **豆まき**は立春の前日の節分の日に行い、子どもは「福は内、鬼は外」と大きな声を上げ保育室内に大豆をまく。そして、炒った大豆を年齢＋１個食べ健康を願う。

２・２・22. **ひなまつり**はいわゆる節句のお祝いで、保育園の玄関に飾られたお雛様を囲んで歌をうたい、成長したことを喜ぶ。もともとは女児の節句だったが、全ての園児が参加する。

２・２・23. **遠足・地域文化広場**は、卒園生と下級生のお別れを記念する遠足で、近隣の市の公園へスクールバスで出かける。

２・２・24. **卒園式**で、卒園生と在園生はお別れとなる。とはいうものの、卒園式以後３月の間は保育園に在籍しているので、必要な子どもは以後も日常保育に出席する。卒園後に担任の片付け仕事を手伝う姿は微笑ましいものがある。

２・３．まとめ

行事で育つものは何かというと、季節感のみでなく、生きるための技術・知識だといえる。このことがこの章の頭で述べた「保育は年中行事なくして成り立たないと言っても大袈裟ではない」ということである。

２・２．で述べたように同じ収穫でも、じゃがいも、落花生そしてさつまいもでは少し関わり方が違う。また、同じさつまいも掘りでも年少の時はいもをとても重そうに抱えているが、年長になるといもを軽々とたくましく持ち上げている。年少の時は、これからどうなるだろうと、どことなく不安そうに掘っているが、年長では次はこうなる、こうしなければと見通しをもって活動している。これらは季節感という狭い枠で考えるのでなく、いろいろな経験知の蓄積の賜物である。

子どもは１つひとつの行事を心に刻み、次の新しい行事に出会い「先回の～とはちょっと違うな」「こちらの方が～だな」「次はもう少し～しよう」と一回りずつ大きくなっていく。その成長の年輪に季節を重ねていると思われる。その行事の経験の年輪こそが季節感の正体である。保育士の役目は、子どもがその行事にしっかり関われるように援助することである。より適した環境を整えること、子ども同士の関わりを育てること、行事に関連する言葉を伝えること、そして行事独特の身体や音楽を用いた表現を伝えることである。子どもは総合的な活動の中で季節の理解を深めていく。

３．海外幼稚園の実践事例

３・１．ドイツの幼稚園の実践事例

共益法人フランクフルト日本人幼稚園は、共益法人フランクフルト日本人国際学校と同じ理事会によって設置され、現地企業とフランクフルト市の支援を受けて経営されている。私立幼

稚園ではあるが市から多大な援助を受け、フランクフルト市の幼稚園規定に則って運営されているため、半官半民の幼稚園のイメージが強い。また園舎も同日本人学校の敷地並びに建物内にあるために、幼稚園・小学校・中学校と附属になっている感がある。

2012年度の受け入れ可能園児数は90名(年長児35名・年中児30名・年少児25名/年度により各学年多少の増減有)、れんげ・たんぽぽ・つくし(各クラス 25 名縦割り編成)・すみれ(15名年少児のみ)の4クラスで保育活動が行われている。25名のクラスには3名の保育士(内1名は半日勤務)、15 名のクラスには2名の保育士がついている。他には園長とドイツ語講師・リトミック講師・ドイツのおやつ作りの講師(3名ともにドイツ人)が保育・運営に当たっている。

3・1・1．外地で育む季節感

フランクフルトは日本の地図に重ね合わせると樺太付近に位置する。そのため日本と同じように四季はあるものの、春夏の季節は短く、秋冬はやや長い。夏は22:00過ぎまで明るく、反対に冬は16:00くらいには暗くなってしまう。夏でも30℃を超える日は少なく、最も寒い時季は－10℃を下回る。もちろん身の回りの動植物、自然環境は日本と異なる。このような気候・自然の中で子ども達が日々の生活を送っていると知って頂きたい。

私達が当地に生活する子ども達に常に気を配っていることは、「日本とドイツの両方をバランスよく体験させること」である。「中庸を取る」これが当園の保育理念の根底にある。季節感を育む環境作り、諸々の保育活動もここから外れることはない。子ども達もそこから日本とドイツのそれぞれの良さ、また違いに気づくことができると考えている。

3・1・2．制作を通して季節感を

制作は年間を通して計画的に行われ、全クラス共通のものと、クラスで独自に行うものがある。題材は「季節行事に関わるもの」と「行事には関わらないがその季節に合ったもの」が選ばれる。出来上がった作品は保育室内を一定期間飾ることになり、また飾りながら活動を発展させ、保育室の壁面・天井は常に変化していくようにしている。

まず共通の制作であるが、(年度開始から順に)子どもの日・母の日・父の日・七夕・ラテルネ(現地の行事で使用する提灯)・クリスマス・節分・ひな祭り・卒園終了記念の各制作である。これは各制作のリーダーが企画し、共通の素材が用いられる。制作の難易度は学年(年長・年中・年少)に合わせて設定される。出来上がった作品は前述のように壁面等に掲示され、保育室の環境の一部となる。子どもは自分達の作品を見ながら生活することになるが、これを積み重ねてきたことによって、友だちの作品のよさを発見したり、自分との違いに気づくことができるようになってきた。

またこの他にクラスが独自に行う制作がある。これは保育者が意図的に環境づくりを兼ねて行うもので、作品がそのまま生活環境の中に組み込まれる。素材も散歩をしながら集めた自然物(葉・枝・石等)を使ったり、身の回りにある生活用品の廃材(空き箱や容器等)を使用することもある。この9月・10月にかけて行われた具体的な事例(テーマ)は、「実りの秋」「日本の秋」「宇宙」などでそれぞれのクラスが自分達の部屋を作り上げた。

「実りの秋」は春から自分達で育ててきた緑色の日本かぼちゃを中心に備え、ドイツのいわゆる普通のオレンジ色のかぼちゃ、飾り用の奇形かぼちゃを並べた。壁面と天井には紙工作で子ども達が作った秋の野菜や木の実が飾られ、りすなどの小動物もいる。その部屋で自分達が育てたかぼちゃを使って全員で料理をし、パイを作って収穫祭を祝った。

「日本の秋」はお月見を中心に扱った日本的な活動と言える。散歩の際に少し足を延ばしてすすきを採って来た。三方はドイツでは手に入りにくいので、厚手の色画用紙で各自が作成。保育者は子ども達といっしょにやや大きめの物を作った。次に月見団子であるが、飾り用の物は小麦粉粘土で作り、食する団子は園庭で育てたかぼちゃを使って、キッチンで保育者といっしょに黄色の(まさにお月さまのような)団子を作った。部屋に飾られたお月見のセットを眺めながら、お弁当の時間に団子を食べ、子ども達はすべて手作りのもので日本の伝統行事を楽しんだ。

表３－１　フランクフルト日本人幼稚園の年間行事

４月：	入園式　身体測定　開園記念式　避難訓練
５月：	子どもの日　交通安全指導　春遠足
６月：	料理の日(クラス別・学年別)　歯磨き指導　学校運動会(一部園児参加) リトミック公開
７月：	七夕の集い(現地交流行事)　消防署見学　体操公開　プール(現地施設)
８月：	身体測定　秋遠足
９月：	運動会　避難訓練
10月：	収穫祭(クラス別)　避難訓練
11月：	聖マルティン祭(現地交流行事)　ドイツ語公開
12月：	ニコラウスの集い(現地理解行事)　発表会
１月：	身体測定　記念撮影　もちつき会(中学部交流行事)　カレー作り(クラス別)
２月：	豆まき　なわとび大会(小学部交流行事)　卒園遠足(年長児) 保育実習(中学部交流行事)　ファッシング(現地理解行事)
３月：	記念植樹(現地理解行事)　卒園式

「宇宙」は気温が下がり、星がきれいに見え始めるドイツの９月の夜空からの発想である。アルミフォイルのような光る素材を使って、最初に「こんな宇宙人がいたら面白いな」という宇宙人作りから開始。壁面は黒の色画用紙で覆われ、星が瞬いている。次は宇宙船の作成－廃材を利用したいくつもの宇宙船が天井から吊られ、その間にはクラスの人気者、ねずみのチューちゃんも宇宙服を着て浮かんでいる。子ども達の夢の空間が保育室の中に作られた。

このように子ども達が保育者の支援のもと、季節に合った生活環境を自らの手で作り、表現・食育等他の領域に関わる活動も合わせながら日常の保育活動を行っている。

３・１・３．行事を通して

当幼稚園は外地にある日本人幼稚園として、日本とドイツの伝統行事を園の行事・活動に積極的に取り入れ、現地幼稚園や日本人学校の児童・生徒との交流活動の場にもしている。入園式や卒園式にも園に関係する諸機関のドイツ人の方に来て頂いている。ここでは園児が主となって活動する行事を挙げ、そのいくつかについて紹介してみたいと思う。

表３－１が園全体で行う毎年の恒例行事である(クラスのみ活動・保護者会行事は別)が、その中で「季節感」や「ドイツならでは」を園児が体験できるものについて紹介する。

３・１・３・１．事例１　聖マルティン祭

聖マルティン祭は聖者マルティン(騎士から大司教となり貧民を救った英雄)の偉業を讃え、毎年 11 月 11 日の夜に手作りのラテルネ(提灯)を掲げ、子どもも大人も行列をなして街中を練り歩く行事である。日本人幼稚園の園児はすぐ近くにある教会の幼稚園ザンクト・アナの子ども達と合同で実施する。ドイツの 11 月 11 日の頃は、寒くまた暗く、一年の内で精神的には一番厳しい季節である。この時季にラテルネの灯で人々の心に温かさや優しさ、勇気を与えるというのがこの行事のねらいである。

10 月下旬からクラスをいくつかのグループに分け、園児・保育者・保護者合同で手作りのラテルネを制作し始める。この作業が始まると子どもも私達も「今が一番暗い季節なんだな。」と感じ、間もなくやって来るクリスマスを待ち望むようになる。(マルティン祭から 2 週間ほど経つとあちこちでクリスマスの市が立ち、街は華やかになってくる。)

当日は降園後、幼稚園の近くの教会に集まり、ミサを行った後に当園の園児と現地幼稚園の園児がいっしょに劇をしたり、ヨーロッパに住む恵まれない子ども達に贈るプレゼントのチャリティ活動を行う。そしていよいよラテルネを持って、歌を歌いながら街中を練り歩くのである。教会に戻った後、聖者マルティンの劇を大きな焚火の周り(野外)で観るのだが、その時子ども達は火(灯)の温かさをあらためて実感するのである。

３・１・３・２．事例２　もちつき会

こちらは新年を迎え、冬休みを終えた子ども達が日本人学校の中学生と毎年いっしょに行っている行事である。各クラスには小さいながらもしめ飾りが飾られ、いかにも日本の正月らしい雰囲気が出される。子ども達は冬休みをヨーロッパの国々や日本で過ごし、それぞれに新しい年を迎えた気分に浸っている。

当日は中学生(男子生徒)が杵と臼を使って餅をつき(不足分は電動餅つき機を使用)、園児に見せてくれる。園児からは「よいしょ！よいしょ！」のかけ声が発せられる。つかれた餅は園児によって丸められ、それを中学生(女子生徒)が味付けする。園児と中学生の共同作業である。磯辺まき・甘辛・黄粉・あんこ・辛味に味付けされた餅は各クラスに分けられ、昼食として園児と中学生がいっしょに食べる。食事を終えた後は、中学生が園児とコマを回したり、すごろくなどをして楽しむ。この行事を通して園児は新しい年を迎える喜びを感じ、また年齢の離れた中学生との交流を図っている。

３・２．オーストラリアの保育現場での実践事例

オーストラリアの保育指導書‘birth to big school’には、保育現場における子どもの自然環境との関わりについて次のように述べられている。

自然環境には子どもたちの知覚を刺激するものが満ちている。脳の研究（Mustard,2007）では、子どもは誕生してからの数年間、乳幼児の時期に非常に重要な知覚的刺激を受けると強調されている。また、脳細胞をうまく連結させるための刺激を誘発するため、一定の絶え間ない知覚情報を与え続けることが必要であるとも言われている。乳幼児の重要な‘仕事’は、段階的に脳の機能を高め物事を認識する力を高めていく過程において、さまざまな情報を蓄積し、分類していくことである。脳は、継続的な知覚的経験を積み重ねていくことによって発達していく。また、幼児は生まれながらにして好奇心旺盛であり、見る、触る、嗅ぐ、聞く、そして食すなど全ての感覚を使って物事を探求している。乳幼児は屋内の活動、屋外の活動問わず、さまざまな場面で知的感覚を養っている。屋外の環境は自然の刺激に満ち溢れている。子どもは、砂、土、岩、葉、樹皮、花や草の触感、匂いなどから知覚、感覚を養っている。子どもは瞬間的に芝の中を這っているとても小さな昆虫を見つけ出したり、花にとまっているミツバチを観察したり、忙しそうに地面を動いている蟻を追っかけたりと、際限なく遊び、自然に親しむ。そして生き物たちの生態を知ることにより優しい気持ちを育んでいる。

オーストラリアにおいても日本同様、保育現場での活動を通して自然環境の変化、季節の移り変わり、動植物の生態などを学ぶことがとても重要であると考えられている。

表３－２はオーストラリア、ゴールドコースト市にあるチャイルドケアセンターＡ園のCalendar of Events 2012（2012年の年間行事）である。

オーストラリアの美しい海、川そして森に囲まれ、日常生活の中でも十分に自然と触れ合うことのできる環境にあるこのＡ園においても､保育の中でNature Art（自然物を使った工作）、Flower Making（花を使った作品制作）、Nature Walking（自然散策）、Sand Castle（砂の城を造る）、Seed Planting（植物の種を蒔く）、Growing Flowers（花の栽培）など、子どもが自然に興味を持ち、季節の移り変わりを体験することのできる多くの機会を提供している。

次に、A 園のディレクター（園長）に対し、チャイルドケアセンターにおいてどのように子どもの「季節感」を育んでいるのかを尋ねた。以下が園長の返答である。

At A Centre we always have lots of fun learning about and teaching the children about the different seasons. We have found that it is a wonderful time to talk to the children about the weather when we are out in the yards for example: sunny, overcast, windy, cold, hot, raining and so forth. From this we can extend with things such as songs, art and stories and Intentional Teaching.

At the beginning of each season Educators would always talk to the children about the different weather patterns and what types of clothes they were wearing and why. This could lead into a variety of activities that would come from the children’s interests.

表３－２　Calendar of Events 2012

25th January	BBQ Whole Centre	バーベキューパーティー
27th January	Water Fun Day	水遊びの日
31st January	Nature Art Day	自然物を使った工作の日
2nd February	Candle Wax Painting	蝋を使った画法を学ぶ
7th February	Flower Making Day	花を使った作品制作
10th February	Magic Mike Show	マジックショー
14th February	Wear Red Day	赤い衣装を着てくる日（バレンタインデー）
20th February	Cooking with Grandparents Day	祖父母と一緒に料理をする日
23rd February	Nature Walking	自然散策
28th February	Fruit Salad Day	フルーツとサラダの日
12nd March	Water Play	水遊び
14th March	Dance Party	ダンスパーティー
15th March	Cooking Day	クッキングデイ
23rd March	Bugs N Kids Show	昆虫ショー
2nd April	Bunny Ears Making Day	ウサギの耳を作る日
4th April	Fancy Dress Day	ファンシードレス　デイ
5th April	Movie & Popcorn Day Easter Bunny Visits Centre	映画とポップコーンの日 イースターバニー訪問
24th April	Messy Play Day	教室を散らかして遊ぼう
27th April	Dress As Your Favourite Character	好きなキャラクターに変身して遊ぼう
3rd May	Mothers Day	母の日
14th May	Grandparents Day	祖父母参観日
21st May	Sand Castle Day	砂の城を造ろう
31st May	Outside Messy Paint Day	園庭でお絵かきをする日
8th June	Dancing Day	ダンシング　デイ
14th June	Seed Planting Day	植物の種を蒔こう
22nd June	Wear Your Favourite Colour	好きな色の服を着てこよう
10th July	Indian Pow Wow Show	インディアンショー
24th July	Crazy Hair Day	クレイジーヘアデイ
15th August	Dental Visit	歯科検診
24th August	Candle Making Day	ろうそくを作ろう
2nd September	Fathers Day	父の日

3rd September	Growing Flowers	花の栽培
6th September	Teddy Bears Picnic	テディ―ベアー ピクニック
20th September	Tic Tac Teddy	チクタク テディ―
2nd October	Balloon Day	ゴム風船の日
12nd October	Face Painting Day	顔にペインティングをしよう
17th October	Pancake Day	パンケーキ デイ
6th November	Movie Day	映画を観る日
20th November	Water Play Day	水遊び
4th December	Beach Dress Up Day	ビーチドレスアップデイ
10th December	Water Play Day	水遊び
14th December	Outside Play Day	野外遊び

Some art ideas would be to get the children to collect leaves from outside and glue these on paper for Autumn or make a big sun to display in the room for summer or a flower garden can be planted for spring and for winter the children could do a display of penguins sliding around in the snow or make big fluffy clouds and wind. We try to stay away from stencil art and prefer the children to create art from what they interpret the weather to be for example using different art mediums to do a painting, drawing or collage.

During group times Educators can do many different types of Intentional Teaching for example using a felt board chart that has the date, month, year, weather and time on it that the children can choose which one matches or sing songs or read stories. Felt stories are always and popular teaching tool that the children love. The most important thing is talking to the children about the weather and asking them many open-ended questions.

［訳］

Ａ園では常に楽しみながら季節の違い、変化というものを教え、学べる環境を整えている。園庭など屋外での活動においては常に気候を確認し、子どもたちに晴れ、曇り、風が強い、寒い、暑い、雨などを意識させている。また、天候、気候に合わせて歌や制作、読み聞かせの内容を考えていくことも重要と考えている。

季節の変わり目には、保育者は必ず気候の変化について子どもと話し合い、衣替えについても考える機会を与えている。これらの活動によっても、季節に関する子どもの意識は高まってきている。

秋には木の葉を拾い、紙に糊付けして作品を作る、夏には教室に大きな太陽を飾り付ける、春には花壇に花を植える、冬には雪の中をペンギンが滑っている絵を飾り、ふわふわとした素材を使って雲や風を表現するなど、それぞれの季節においてさまざまな活動、装飾を行ってい

る。そして、既成の作品ではなく、子どもが園での活動の中で創作したものを活用するよう心掛けている。

子どもはフェルト製の図表を使いながら、季節だけでなく、日付や時間などを学んでおり、その時々の季節や気候にあった歌や絵本を選び、楽しんでいる。子どもと季節や気候の変化について話し合い、意識を高めていくことはとても重要なことであると認識している。

４．考察

１．のＨ幼稚園の教育課程では「季節感を指導する」というような季節感を強調するような教育活動は行っていない。しかしながら、図１－１　こいのぼり制作、図１－２　みかん狩りの行事の写真を見るとひとりでに５月の風、晩秋から初冬のにおいが感じられる。本文中にもあるように、幼稚園では生活と教育が重なり合って存在するため、生活のなかで季節に関する教師の発言は多いと予想できる。そのため、あえて教育課程や指導案に季節感の指導を強調して記載することはないが、活動に多く取り入れられていると考えられる。

一方、２．のＴ保育園では季節行事を通して保育が展開され、その中で季節感の指導も展開されている。決して大袈裟な表現ではないが「保育園の保育は年中行事や季節行事なくして成り立たない」と言っても過言ではない。行事を通して季節感のみでなく、自然感を育て、身体を鍛え、社会性を身に付け、言葉を磨き、表現できるようになっていく。もちろん、それに付随した知識、技術も豊かに高めていく。

ドイツ・フランクフルト日本人幼稚園で「当地に生活する子ども達に常に気を配っていることは、『日本とドイツの両方をバランスよく体験させること』」である。その日本的なものとして選ばれた行事が、子どもの日・母の日・父の日・七夕・クリスマス・節分・ひな祭り・卒園終了記念の各制作、そしてお月見、もちつき会である。母の日、父の日も含め、どれも季節感が取り入れられており、日本人ならなつかしい行事ばかりである。

オーストラリア・ゴールドコースト市Ａ園の園長先生によると「季節感の指導は、常に楽しみながら季節の違い、変化というものを教え、学べる環境を整えている。園庭など屋外での活動においては常に気候を確認し、子どもたちに晴れ、曇り、風が強い、寒い、暑い、雨などを意識させている。また、天候、気候に合わせて歌や制作、読み聞かせの内容を考えていくことも重要と考えている」ということだ。表３－２　Ａ園の年間行事をみると、宗教色というか、あまり歴史を感じられない。オーストラリアの歴史は浅く、特にゴールドコーストは開発真っ最中の都市で、歴史に縛られないフロンティア都市での季節行事という感がある。園長先生がおっしゃるとおり、「季節の決め手は天候、気候」である。

我が国は歴史も長く、古代中国からの流れも汲んでおり、季節の移り変わりを表すものとして、月、二十四節気[6)]、七十二候がある。七十二候では５日間ごとに気候の変化を捉えるわけで、古代人の五感の素晴らしさを表している。

本稿の目的は、すべての源泉である季節感の指導が保育において実際にどのように展開

されており、幼稚園教育要領第２章の「環境」２内容（３）がどのように実現されているかを、諸外国の事例との比較も含めて検討することである。その点は、幼稚園、保育所、ドイツ・フランクフルト、オーストラリアにおいて季節感の指導がどのように行われているかは、ここまで見てきた通りである。すでに述べたとおり、日本の幼稚園や保育園、日本を標準とする幼稚園の季節感の指導は長い歴史的・文化的背景をも含んでいる。領域「環境」のみでなく、各内容は１つ１つが独立したものではない。他の項目、他の領域との関係をも考慮してより有効的な指導について今後も探っていきたい。

＜引用・参考＞

（１）幼稚園教育要領解説・文部科学省・フレーベル館・2008
（２）金森由華他・『保育科学生の生活体験に関する研究―本学学生の場合―』・2011
全国保育士養成協議会第 50 回大会研究発表論集 p 132
（３）①「さくら」歌手・作詞：森山直太朗・作曲：御徒町凧・2003、②「桜」歌手：コブクロ・作詞・作曲：小渕健太郎・黒田俊介・2005、③「SAKURA」歌手：いきものがかり・作詞・作曲：水野良樹・2006、④「櫻」歌手:氷川きよし・作詞：なかにし礼・作曲：平尾昌晃・2012
（４）木村治美・黄昏のロンドンから・ＰＨＰ研究所・1976
（５）文部省・保育要領・1948
（６）萌文書林編集部・子どもに伝えたい年中行事・記念日・萌文書林・1998